

心理臨床学的研究への現象学的アプローチの貢献の可能性

— 個別性と普遍性に着目して —

鹿児島市精神保健福祉交流センター

鹿児島市男女共同参画センター

鹿児島純心女子大学大学院

中 村 誠 文

岡 田 明日香

藤 田 千鶴子

和文要旨

本研究では、心理臨床領域とその近接領域における現象学的アプローチによる研究を概観し、臨床心理学的研究への現象学的アプローチの可能性を検討することを目的とした。

近年、現象学的アプローチによる研究は、様々な領域でおこなわれるようになり、経験の記述が試みられてきた。「生きられた経験」の記述は、その経験の個別性を損なうことのないようつとめ、同時に「ある出来事を経験することはどのようなことなのか」その経験の持つ意味を明らかにしようとする。心理臨床領域において、クライアントの「生きられた経験」を捉えていくことは内的世界の理解につながるといえ、「生きられた経験」の構造に視点をあてることによって、クライアントの個別性 (particularity) に添いつつそこから開けてくる地平を捉えていくことで普遍性 (universality) が露わになってくると考えられる。これらのことから、現象学的アプローチは、個別性と普遍性をともに保持することが可能であるという点で心理臨床学的研究に貢献できると示唆された。

キーワード：心理臨床学的研究 現象学的アプローチ 個別性と普遍性

I はじめに

17世紀の西欧の自然科学や資本主義の思想の発展、またDescartes,R.の心身二元論などが「心」を科学的研究の対象となる契機となった。1879年にWundt,W.がライプチヒ大学に心理学実験室を開設し、心理学が自然科学の一分野となり、以後、行動主義、ゲシュタルト心理学と展開され実証科学を土台とする「科学的心理学」として今日の心理学の礎となった。一方でFreud,S.フロイトが精神分析を創始し、実証心理学と深層心理学が心理学の二大潮流として展開されていった。その後、1960年代からは、現象学的アプローチを含んだ現象学的心理学が生まれ、第三の潮流として進んでいくこととなる (山竹,2010)。

臨床心理学の歴史は、1896年にアメリカのペンシルヴェニア大学の心理学者Witmer,R.がアメリカ心理学会の総会で初めて『臨床心理学

(clinical psychology)』という言葉を用いたことが初めてだといわれている。その後、臨床心理学は、第二次世界大戦後のアメリカで帰還兵に生じた多くの戦争神経症への対応、また近年では日本での阪神淡路大震災、東日本大震災への対応など社会的な専門的支援領域として期待されるようになった。それに伴って、臨床心理学が一貫した体系・理論を備え、有効な実践活動を提供できるというエビデンスを社会に示していく説明責任を果すことが課題となった。現代の臨床心理学においては、自然科学の方法論をどのように適用し、かつ個別性をどう保持していくか、量的研究と質的研究による研究が課題であるといえる (下山・丹野,2001)。

質的研究方法は、これまで文化人類学や社会学領域でひろく採用されてきたが、近年、臨床心理学のみならず医療・看護・福祉・教育などの領域

においても用いられるようになった。複数のサンプルからデータを収集し、事象を数量化して統計的に分析する量的研究とは異なり、質的研究は、数量化が難しく変数として取り扱いにくい内的世界や文脈などの事象を記述的に分析・解釈しケースの個別性に視点をあてることができる。Mcleod,J.(2007)は、「質的研究は、世界がどのように構成されているのかについての理解を深めることをその第一の目的としている」と述べている。質的研究は、人がどのように世界を理解するか、人が出来事をどのように経験するかに関心を持っており(下山,2004)、その経験をできるだけ明らかに記述し説明しようとするものであるといえる。

臨床心理学領域では、研究の特性として事例研究が用いられることが研究として確立されている。そこでは個別のクライアントの研究であるという資質上質的研究との共通点が多いといえる。

本研究では、心理臨床領域と関連する他領域の中でも現象学的アプローチによる研究が多くみられる看護領域での現象学的アプローチに関する研究を概観することから始めて、心理臨床学の領域における研究への「現象学的アプローチ」の可能性を、特に、一見両立困難にみえる個別生と普遍性をともに保持しようという点に着目して検討することを目的とする。

II 研究方法

研究方法については、心理臨床・心理学・医療・看護・福祉・教育をキーワードとし、それらの領域で「現象学的アプローチ」に関する文献を選定した。文献は、現象学的研究の方法論自体について述べられているものと、現象学的アプローチによる研究、と大きく二つに分けられるが、本研究では、現象学的アプローチによる研究に視点をあてることとした。文献を収集するにあたり各領域の書籍、学会誌論文を調べ、CiNii-Aericles(国立情報学研究)も活用した。

III 現象学と現象学的アプローチについて

1. 現象学とは

現象学は、20世紀初頭にドイツの哲学者Husserl,E.によって創始された。Husserl,E.は当時隆盛だった自然科学に対して、それは一つの考え方にすぎないとし、「ありのままの現象」に立ち帰るべきだと「現象学運動」を始めた。もともと数学者であったHusserl,E.は、「記述心理学」を提唱したBrentano,F.の影響を受けている。記述心理学とは、「意識の内部知覚をよく反省、観察し、これをそのまま記述していくという方法」(竹田,2005)である。Husserl,E.は、これをきっかけに「志向性」という意識に関する概念を導き出し、意識は必ずなにものかについての意識であり、すべての意識作用は対象に向けられていると考えた(Giorgi,A.,2004)。

Husserl,E.は、現象を明らかにするため、「現象学的還元」、「現象の本格観取(直観)」という概念を提唱した。「現象学的還元」とは、「意図された懷疑によって世界をみなおしてみること」(竹田,2003)であり、Husserl,E.は、意識を可能な限り最も純粋な状態で捉えようとした。現象学的還元の作業とは、「客観的世界が実在している」という確信(信憑)を保留にし(「現象学的判断停止(エポケー)」)、確信の根拠を問い直す作業であり、この作業によって、現象学的記述の営みが可能になるとされる。

本質直観とは、「誰もが共通して了解し得る意味(普遍的な意味)を取り出す作業である」(山竹,2010)。彼は、事物を現前させる(ありありと意識させる)意識の働きを直観(intuition)と名付けた。こうした現象学に特有な思考により多くの人が共通了解し得る意味＝「本質」を取り出し解明する作業を現象学的態度といい、現象学的態度を介して初めて本質は現前し、深く理解し得るといわれている。

Husserl,E.の現象学は、彼自身によって常に深化され、Heidegger,M.やSartre,J.P., Merleau-

Ponty,M.らに受け継がれそれぞれに展開された。1927年にHeidegger,M.は、『存在と時間』の中で、「現象学という表現は第一次的には一つの方法概念を意味する」と明言している（村田,2013）。Heidegger,M.は、人間の日常的なあり方や人間の存在本質について述べ、現象学的あるいは実存主義的立場に立つ心理学者たちに多くの影響を与えた。彼はまた、現象学的記述という独自の方法を解釈学としても捉え直し、「現象学的解釈学」ともいわれている。初期のSartre,JP.は、心理学的概念の本質観取を試み、これを現象学的心理学と呼び、「情動」という心理学概念について述べている。Merleau-Ponty,M.は、『知覚の現象学』の冒頭で「現象学は本質の研究であり、いっさいの問題は、現象学によれば、結局は本質を定義することに帰結する。また、同時に本質を存在のうちに据えつけなおす哲学でもある」と述べ、Husserl,E.の「生活世界」を身体的主体によって「生きられた世界」と位置付け、現象学的記述を目指した。

現象学とは、完結した一つの理論体系といったものとは考えず、あくまでも開かれた方法論的態度である、といわれている。その意味で現象学は、定式化されたものではないが、Husserl,E.の現象学から始まり、様々な研究者が現象学を実践し、生きられた経験の意味の記述を試みる学問であるといえる（木田,1970）。

2. 現象学的アプローチとは

現象学的アプローチは、Husserl,E.やHeidegger,M., Merleau-Ponty,M.らの現象学を継承し、Giorgi,A., Colaizzi, P., Keen,E., van Manen, M., Cohen,M.Z.といった様々な研究者によって提唱されている。現象学的アプローチの実践の場は、看護学、心理学、教育学と多領域に渡っており、その領域に関わらず、人間の経験に関心を持ち、その経験の意味を明らかにすることを試みるという点で共通している。

「現象学的アプローチ」という言葉を概念化し、分析を体系化したのは Giorgi,A.であると言われている（吾妻,2004）。Giorgi,A.(1989)は、『現象学的心理学の系譜』において、伝統的な心理学の自然科学的アプローチとは異なった「人格としての生きた人間」への適切なアプローチを確立していくための方法論の必要性を説き、方法論として「現象学的アプローチ」を示した（吾妻,2004）。彼の現象学的アプローチは、Husserl,E.の現象学を継承し、Giorgi,A.独自の「科学的現象的方法」を開発している。

ほぼ同時代に「現象学的心理学」を提唱した Keen,E.(1989)は、体系化した方法論の提供としてではなく、経験の構造の記述について詳述している。彼の現象学的アプローチでは、人間の経験を日常生かされているがままに探求しようとする。Keen,E.は、現象学的記述によって人間の生かされた経験の構造とその意味の明確化を試みる。van Mannen,M.(1990)は、人間科学の研究と記述への解釈学的な現象学的アプローチを研究、実践している。彼は、現象学的研究は、生かされた経験の研究であると述べ、それは「経験を概念化するのではなく、我々がそれを生きるように経験を探究すること」であると述べている。

現象学的アプローチは、各領域に応じて様々な方法論が展開されているが、Peirce,C.S.ら(1985)は、「現象学的アプローチとは、現象学を基礎とするものであり、因果関係を明らかにしようとするものではなく、むしろ生かされた体験（lived experience）としての現象の本質を明らかにしていくことを探究する記述的研究である」と述べる（広瀬,2007）。要約すると、現象学的アプローチとは、現象学的還元を通して、直観と分析と記述という3つのプロセスを含み、様々な事象に現象学的態度でありのままに近づき『生かされた経験』の記述をしていく試みであるといえる。また、人間科学的研究として、個別性から「本質」、そして普遍性を探究する研究方法でもあるといえる。

IV 現象学的アプローチによる研究の概観

教育学の領域においても、現象学的研究がすすめられ、近年注目されるようになってきているが（例えば村上,2008;中田,2008）、看護領域の現象学に関する論文は、他領域に比べると非常に多い。看護においては、現象学的看護理論の1つである Benner,P./Wrubel,J.の現象学的人間観や理論が寄与していることが大きいと考えられる。また、看護学において質的研究が1980年代前半から認められ、看護ケアに関する質的研究の1つの方向として、「現象学的アプローチ」が注目を集めたことに起因する。

1. 看護領域における現象学的アプローチによる研究

榊原(2008)は、『看護ケア理論における現象学的アプローチには、大きく分けて「患者の病気体験ないし、その意味をその人が体験しているがままにありのままに理解し認識しようとするために現象学的還元の遂行や現象学的態度を求めるもの」と「病気を体験している患者やその家族、そして彼らにケアという仕方に関わる看護師の在り方を理解し解釈するためにそもそも人間という存在者がどのような在り方をしているのかについて現象学に知見を求めるもの」という、二つの系統があるように思われる』と述べ「前者は、フッサールの現象学的認識論の精神を受け継いだものであり、後者は、ハイデガーやメルロ＝ポンティの現象学的存在論の知見に依拠するものであると言ってよい」とも述べている。

渡邊ら(2004)が統計の「検討対象」とした看護領域における現象学的アプローチ（解説、研究論文、研究ノート等）において「最も多く使われている」と見なした研究方法是Giorgi,A.のアプローチであった。

以下で概観する現象学的アプローチを用いた看護研究では、「体外受精・胚移植を受けることを

めぐり女性が経験していること」（信岡・鈴木,2001）「意思決定を支える看護師の役割葛藤」（渡邊・菊井・他,2004）「重度心身障害のある子どもを育てる母親の子どもへの認識に伴う体験」（柴田,2005）、「10代女性の妊娠継続の経験」（小川・安達他,2007）、「軽度から中等度の障害を持つアルツハイマー病患者の認知体験の構造」（鈴木・横手,2008）、「学士課程で助産を選択する学生の分娩介助における学び」（松井・永山他,2011）、「医療監察法入院患者の入院生活の経験」（牧野・浦川,2013）、「看護師の透析室における臨床」（村上,2013）、等とテーマは多岐に渡っている。また、方法論は、Giorgi,A., Colaozzi,P., Benner,P.等による分析方法が採用されており、中でもGiorgi,A.による現象学的アプローチを用いた研究が多い。ここでは、渡邊ら(2004)、千田(2010)が報告するように、Giorgi,A.による研究が多くみられるため、分析方法においてGiorgi,A.による分析方法を用いている研究をいくつか取り上げることとする。

（1）柴田(2005)による研究

柴田は、重度心身障害のある子どもを育てる母親の子どもへの認識に伴う体験から、子どものこのころの動きを認識する体験に主眼を置き、その体験を記述し理解することを目的に質的記述的研究を行った。分析方法は、Giorgi,A.(1985)の手法を参考に、分析した結果の共通性と個別性を見出している。結果では、研究参加者3名それぞれの構成要素としての意味の単位が抽出された。体験の構成要素の意味の単位として、【すごく反応がよかった】【常にアンテナを張り巡らせている】【喜怒哀楽をはっきり出せるようになってきた】等が抽出されていた。そして、母親の体験の記述から、母親たちは、子どもの表現する意思や主張、及び感情に移された表現や反応を認識しており、母親たちは子どもの心の動きを見出し、子どもなりの反応や理解を意味づけることで、よりその子らしさに近づく体験をしていたことが明らかにさ

れていた。一方で、主体を認識することが、母親にとって必ずしも育児の喜びや意欲につながらないことも見出されている。

（２）小川ら(2007)による研究

小川らは、10代女性が妊娠を継続するに至った体験がどのような意味を持っていたのか探究している。研究参加者は8名であり、Giorgi,A.(2004)による現象学的研究方法を参考にした。結果では、10代女性それぞれが妊娠を継続するにいたった体験をその中心的な意味を示してから、時系列でその意味づけとなった構成要素ごとに記述している。最後に、研究参加者の体験の特徴を挙げて類型化し共通点を明らかにしている。それぞれの体験の中心的な意味においては、「苦労した生い立ちからの早期脱却と、結婚できなくても母親になりたいという強い願望」、「過去の中絶の後悔から今回は産むという決意のもと、両親の祝福も受けた価値ある妊娠」「予定外妊娠という心身の辛さと共に、合格大学を退学したくないため学業との両立を決意」といった意味が明らかにされていた。また、8名の体験の特徴として、①『中絶体験の後悔』、②『周囲の人による受け入れ』、③「医療従事者の否定的反応」、④『新しい家族を築く憧れ』、⑤『自分の意思を貫く強さ』という5点の共通点が明らかにされていた。

（３）松井ら(2011)による研究

松井らは、学士課程で助産を選択する学生の分娩介助10例における学びを明らかにするために質的記述的研究を行っている。研究参加者は、大学で助産を選択している学生4名であり、分析方法においては、Giorgi,A.の方法を参考に記述・解釈を行っている。

松井らは、学生の語りから導かれたものとして、分娩介助実習における4名の学生の学びの構造を次のように報告している。「学生の分娩介助実習における学びは、初めての分娩介助において想像と現実の違いに、戸惑いながら分娩という現実を感じ取る。そして、分娩進行を欲心するケアに実

践しながら、助産に寄り添うことを大切にする。一方、自己の分娩介助経験を振り返り、学びと課題を確認する。10例終了後に、分娩時の異常発生への対処はこれからの課題であることを認識するという過程である」。そして、松井らは、この構造の導出の根拠として、学生それぞれの語りと研究者の解釈を示している。そこでは、「実際の分娩に立ち会い、戸惑いを感じながらも、分娩という現象を肌で感じる。その中で生命の誕生に立ち会える喜びと助産師の責任の重さを感じた。一方、対象である産婦と関わっていなかったことに気づく」という学生の経験や、「産婦にとっての分娩体験を意識し、産婦の意思を尊重した上で、産婦の身体状況を捉え、産痛緩和の援助をしていく、このような関わりを通して産婦との関係性を構築することができる感じる」といった学生の経験が報告されていた。

（４）鈴木ら(2008)の研究

鈴木らは、アルツハイマー病(AD)患者の生活世界とその認知行動特性を明らかにしようとした。研究参加者は、AD軽度から中度と診断され、単身で有料高齢者住宅に入居しているAD患者10名であり、面接が実施された。また、分析には、参加観察のデータも用いられている。分析は記述的解釈学的方法が用いられ、Giorgi,A.による分析方法も用いられた。結果において、AD患者と共にある生活世界においては、「日常行為のつまずき」、「生活トラブル」、「表現されない身体」、「生活の場の乱れ」、「身近な家族の錯誤」、「居所の曖昧さ」、「社会への平板な関心」、「儀礼の表面的振る舞い」、の8つのカテゴリーで構成される認知行動として理解された。そして、それぞれのカテゴリーは、「記憶」「判断」「情動」「表出」の共通する4つの構成要素で解釈できる体験構造が見出されたと報告されている。また、鈴木らは、8つのカテゴリーごとにその解釈を記述して定義を導くことを行った。例えば、「日常行為のつまずき」の定義として、「日常に行っていた一連の行為が

目的を失い(記憶), 判断に伴う連続性が途絶えて戸惑っている体験(情動・表出)」、「生活トラブル」カテゴリーでは、「鍵, 財布の所在が分からない, 生活の仕組みが思い出せず(記憶・判断), 困惑と騒動(情動・表出)に関係者を巻き込む体験」、「表現されない身体」カテゴリーでは、「からだにあるアザや傷が身に受けた経験(記憶・判断)として表出されない様態」と定義されていた。

2. 心理臨床領域における現象学的アプローチによる研究

心理学においては, 現象学的アプローチ, 解釈学的現象学, 現象学的記述など方法論に関することや基礎心理との関連論文が比較的多い。そして, 心理臨床領域においては, 質的研究の中でも事例研究が用いられていることが多いが, 現象学的アプローチによる研究は少ない。ここでは, 心理臨床領域における現象学的アプローチによる研究を概観していきたい。

(1) 上野(2004)による研究

上野は, 人が涙というとき, いかなる受け止め方をし, どのようなコンセプトやイメージをその心の内に描き, 抱いているのかに関して自由記述で記述された事項をDuquesne大学による経験的現象学的意味分析法にならい分析を行っている。涙コンセプトは, ①客観的事項, ②象徴的イメージ, ③いつ, どこで, なぜ涙が流れるか, ④涙が人にとってもつ意味と効用の4つの意味体験カテゴリーから構成され, 涙に対して肯定・開示・親密の態度と, 逆に否定・閉鎖・疎遠の態度とが類別される。こうした結果は, 感情体験の表明としての涙が人の心の内に迫り, 援助的理解をはかる臨床心理学上きわめて重要な意味と効用をもつことを示唆していることを明らかとした。

(2) 上野(2005)による研究

上野はまた, 感情体験表明としての涙が援助的理解にとってもつ意味と効用に関して検討を加えている。方法は, ショッキングな出来事を契機に

人間不信に陥ったケースを例示し, 援助的理解をはかるT様グループのかかわり合いのプロセスに経験的現象学的方法による意味分析を試みている。検討結果は, ①感情体験表明としての涙がその意味を効用たらしめるのには, 送り手と受け手の反応の仕様が大きくあずかっている。②涙は心理的なしこりを溶かす。③涙は抑制された情緒的エネルギーを解放し, カタルシスをはかる。④涙は心の傷を癒す。⑤涙は気づきや洞察への契機となり, 導き手となり, その証明を確認する。⑥涙は援助的理解を確実にし, また深めていく。⑦涙は, 人をして生涯時間の時制を“生きられた時間”の展望に向けた再編成をはかり, そこから新しく生産的で健やかな生活世界への道を開く。すなわち, 過去を今に引き入れ既往化し, 新しい意味づけを見出し, これを足場に, 未来を将来化し, 新しい展望を拓らくのである。⑧なお, 涙は, 丁度ステロイド剤がそうであるように, 両刃の刃で, その効用と同時に有害ともなりうるとの認識の重要性が指摘されている。

(3) 立入(2007)による研究

立入は, 一般青年を対象に青年期における孤独感の現象学的研究を行っている。立入は, 二部構成による分析を行い, 一つは, 修正版グラウンデッド・セオリー, 今一つは, 個人別態度構造分析法である。分析の結果, 修正版グラウンデッド・セオリーによる分析では, 「児童期的心性」「内側のさみしさ」「傷つき」「嘆き・絶望」「信頼・安心の上にある繋がり」「狭間で揺れる」「大人へ向かう」「自分と対面・対話」「主体的・積極的な生き方」, という9つのカテゴリーが抽出された。また, 分析2では, それぞれに多義的な「孤独感」が明らかになった。立入は, 「青年期の孤独感」は多義的で, 個々によってその感じ方の程度や中身は異なり, 発達的に変容していくことが示唆された。また, 青年は孤独感のさみしさに耐えられる程, 自我は強くないため, 孤独を恐れ, 回避する傾向が強く, しかし, 孤独感は青年の自律にとつ

て回避できない生活感情であり、青年が新たな自分、主体的な生き方を獲得していくためには恐れずに孤独と向き合い、受け入れることが大切であること」と報告した。

VI 考察

現象学的アプローチは、各領域や研究者・実践者に応じて様々な方法論で展開されているといえる。看護領域において最も多く採用されている研究方法は、Giorgi,A.のアプローチであった。吾妻(2004)は、『1980年代には、心理学者ジオルジによる「現象学的アプローチ」と称される研究方法が開発され、看護界にも導入された。こういった手法を用いた看護研究が本来の「現象学」の意図するところを体現できているかどうかについては検討の余地を残している(p.42)』と述べている。ジオルジが分析を体系化したことで「現象学的アプローチ」として多くの研究の方法としてもちいられており、Giorgi,A.の功績は大きいといえる。しかし、一方では、吾妻(同上)が指摘しているような側面もあり、体系化することで「生きられた経験」の独自性が損なわれる可能性があり、共通性を見出だすにとどまる危うさを秘めているのではと考える。Peirce,C.S.ら(1985)は、「現象学的アプローチとは、現象学を基礎とするものであり、因果関係を明らかにしようとするものではなく、むしろ生きられた体験(lived experience)としての現象の本質を明らかにしていくことを探究する記述的研究である」と述べている(広瀬,2007)。

現象学的アプローチによる研究では、人がある出来事を経験するということはどのようなことなのか、「生きられた経験」の意味に関心が持たれていた。Keen,E.(1989)は、経験が意味を持つことについて、「経験が構造化されているということこそが経験が意味を持つということである」と述べる。また、「もろもろの出来事はある一つの背景を背にして現れる」とし、「背景」のことを

「地平」と呼ぶ。出来事は地平を背に現れ、地平は出来事に意味を与え、それによって経験は意味をもつとされる。これはゲシュタルト心理学の「図と地」の関係にも近いといえる。そして、経験の構造には、ある空間的、時間的、対人関係的なコンテクストが埋め込まれている。日常生活の空間や時間をとってみても、それをどう意味づけるかは、その人の内的世界と関係しており、自然科学的な客観的なものでは現わすことは不可能である。Van den Berg,J.H.(1976)は、『人間ひとりひとり』の中で、ある冬の晩、ワインの瓶を準備しながら友人が来るのを楽しみに待っている「私」の経験を記述し、他者の存在や関係が私の世界のあり方、この場合、ワインという「もの」が「私」にとって意味するものにいかに影響を与えているかを明らかにした。

このような経験を、地平あるいはコンテクストとの関連において考察し、そこから経験の持つ意味をいくつかのテーマとして浮き彫りにした臨床心理学の領域における研究として、以下の研究を挙げることができる。

岡田(2007)は、不登校研究において、母親が子どもの不登校を経験するとはどのようなことかその経験の意味を明らかにしようとした。研究参加者である子どもの不登校を経験した母親14名へインタビューを行い、母親の語りへKeen,E.(1989)の現象学的アプローチによって接近した。母親の語りから、「不意」、「不安」、「揺らぎ」、「原因探し」、「ターニングポイント」、「経験の捉えなおし」、と6つのテーマが現れた。岡田は、母親の生きられた経験の構造は、過去・現在・未来の連続性を絶たれることによって、それまでとは全く異なった仕方で現れたと報告している。母親は、それに「不意」を感じ、絶たれた未来に気づき、その未来が「不在としての未来」であることにより、途方もない「不安」を感じた。また、母親の空間的な場の相貌には、他者、つまり子どもが普段とは異なった仕方で加わり、母親は、子

どもが母親から最も近い場所にいるにも関わらず、子どもを遠くに感じていた。母親の時間的構造は、過去の子どもの記憶、未来への予期を背景にして意味を与えられ、また、時間的連続性を取り戻し、母親は、先のある未来を見た。岡田の研究では、子どもの不登校という出来事は、母親にとって母親の生きられた経験の連続性を奪い、揺るがすような出来事であったと報告されている。

田中(2014)は、広汎性発達障害児・者のきょうだいに関する質的研究を行っている。20代の広汎性発達障害の同胞を持つきょうだい3名の語りにKeen,E.(1989)の現象学的アプローチによって接近し、「これまで同胞との生活でどのような経験があり、また、現在その経験をどのように意味づけしてきたのか」を明らかにしようとした。研究では、6つのテーマが現れてきている。「障害への違和感と認識—同胞の存在としての了解」、「きょうだいとして通る道」、「同胞に忘れられる・きょうだいと認識されない経験—気持ちや経験の共有のできなさ」、「他者からの目・偏見の目」、「同胞の世界の中にきょうだいとして存在していると感じる経験」、「健全なきょうだいへの憧れ—持ちえなかった経験の想像」である。ここでは、きょうだいの語りより、“障害への違和感と認識”の経験について、きょうだいにとって当たり前の存在である同胞は、障害と分けて存在しているのではなく、その障害を内在した“同胞の存在として了解”されていること、「普通のきょうだい」の存在を知り比較することで、「障害ってこういうことなんだ」という“認識”に変わること、また、同胞に忘れられる・きょうだいと認識されない経験について、その地平には、同胞が「思っていることを発せられない」など、同胞との交流が「一方通行」であるという“気持ちや経験の共有のできなさ”があることなど、障害を持つ同胞のきょうだいの経験の構造が明らかになっている。

私たちが経験の意味を探求し、その経験はどのような構造を持つのか知ろうとする際、Keen,E.

(同上)は、例を挙げる中で、ある出来事の構造を理解するためには、「まずその場についての彼の経験が統合しているいくつかの地平を記述することで、その場を分析することができる」と述べ、「彼がその世界とそこでの自分の位置をどう解釈しているか、というコンテキストの中でみなければならない」と述べている。また、van Manen,M.(1990)は、「現象学的リサーチは、the attentive practice of thoughtfulnessといえる。」と述べている。そして、もし、最も適切に現象学自身を特徴づける単語があったならば、それは‘thoughtfulness’(思慮深さ)であると表現している。研究者は、思慮深さを注意深く働かせることにより、まるで楽器のチューニングのように相手を理解しようとし、自分自身を相手に合わせてチューニングしようとする。そこで、自らをチューニングすることにより、相手と響きあい、構造の再現化がなされる。Van Manen,M.(同上)は、構造の再現化により、テーマが表れてくるのであると説明する。研究者は、「人間的存在」として他者の生活世界に入るからこそチューニングをするのであり、チューニングしている間は、研究者は自分の生活世界を括弧の中に入れ、横においておく。忘れるのでもなく、捨てるのでもなく、そこにおいてあることには気づいているが、相手と響きあうためにその作業を行うのである。

『知覚の現象学』の序文で既にMerleau-Ponty,M.は、「還元の最も偉大な教訓とは、完全な還元は不可能だということである」と述べている。それは我々が身体を持った存在としてこの世界に在るからであるが、それだからこそ、さまざまな様相を持つ地平、個々の人間の存在ととりまくコンテキストを明らかにし、理解することは、心理臨床においてクライアントを理解することにつながる。

Keen,E.(1989)は、「臨床心理学の目標についての私たちの言い方をここで使えば、それはあるひとがどのように世界を見ているのか、ほかにどんな

世界の見方がありうるのか、ほかにどんな世界内に存在するあり方があるのか、ということそのひとがはっきりと見るのを助ける、ということである」と述べている。「そのひとがどのように世界をみているのか」、クライアントの「生きられた経験」の構造に視点をあてることで、そのひとの個別性が、そしてそこからつながる地平を捉えていくことで普遍性が露わになってくると考えられる。多くの個別性から抽出された共通性ではなく、個別性を捨象した一般性でもない、個別性を包括しつつ個別性の中から逆照射されて浮かび上がってくるようなものとしての普遍性を明らかにすることも、このような現象学によって可能になる。Van Manen, M.(1990)は、現象学的リサーチは、「現象学の間人間科学的研究である」と述べる。彼は、現象学は組織的で、明示的 (explicit) で、自己批判的 (self-critical) で間主観的 (intersubjective) な生きられた経験の主題の研究であることから、科学的であると述べている。現象学的アプローチ等の質的研究と量的研究は相補的な関係でもある。これらのことから心理臨床領域で臨床や研究の中で「現象学的アプローチ」が貢献できるのではないかと考える。

引用・参考文献

- 吾妻知美(2004): わが国における看護の現象学的研究. 天使大学紀要4, p.41-51.
- Giorgi, A., 早坂泰次郎監訳(1981): 現象学的心理学の系譜. 勁草書.
- Giorgi, A., 吉田章宏訳(2013): 心理学における現象学的アプローチ. 新曜社.
- Giorgi, A., 吉田章宏訳(2004a): 看護研究への現象学的方法の適用可能性(焦点 看護研究と現象学的アプローチの動向). 看護研究37(5), p.421-429, 医学書院.
- Giorgi, A., 吉田章宏訳(2004b): 特別記事経験記述資料分析の実際-現象学的心理学の『理論と実践』[含 質疑応答]. 看護研究37(7), p.607-619, 医学書院.
- グレッグ美鈴・麻原きよみ・横山美江(2007): よくわかる質的研究の進め方・まとめ方-質的研究のエキスパートを目指して. 医歯薬出版.
- 広瀬美千代(2009): 家族介護者の「生きられた世界」の語りの検証-現象学的アプローチにおける質的分析を通して. 介護福祉学16(1), p.88-96.
- 今西誠子(2013): 入院児に付き添う母親の苦しみ. 京都市立看護短期大学紀要37, p.13-23.
- Keen, E., 吉田章宏・宮崎清孝訳(1989): 現象学的心理学. 東京大学出版会.
- 木田元(1970): 現象学. 岩波新書.
- 木戸裕子・横尾京子他(2012): NICUに入院した子どもの退院を決心するまでの母親の経験. 日本新生児看護学会雑誌18(2), p.10-18.
- 栗原輝雄(1972): 病弱・虚弱児の行動理解への現象学的アプローチ. 特殊教育学研究10(2), p.9-16.
- 牧野英之・浦川加代子(2013): ある医療観察法入院患者の体験の語りとその解釈-臨床看護師による現象学的アプローチ-. 三重看護学誌15(1), p.9-18.
- 松井弘美・永山くに子他(2011): 学士課程で助産を選択する学生への分娩介助10例における学び-分娩介助実習体験を中心に. 富山大学看護学会誌10(1), p.37-47.
- McLeod, J., 下山晴彦監修, 谷山明子・原田杏子訳(2007): 臨床実践のための質的研究法入門. 金剛出版.
- Merleau-Ponty, M., 竹内芳郎・小木貞孝訳(1982): 知覚の現象学1. みすず書房.
- Merleau-Ponty, M., 滝浦静男・木田元訳(1966): 目と精神. みすず書房.
- 村田観弥(2013): 実践者にとっての現象学的研究法とは何か-対人支援における「理解」のための研究者態度と方法論の検討. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要7(1), p.117-134.
- 村上靖彦(2013): 透析室における「見える」もの: 看護師の語りの現象学的分析. 大阪大学大学院人間科学研究科紀要39, p.293-314.
- 西村ユミ(2010): 看護実践はいかに語られるのか? グループ・インタビューの語りに注目して. 質的心理学会フォーラム2, p.18-26, 日本質的心理学会.
- 野中ますみ(2007): 介護福祉における質的研究についての一考察-看護研究における現象学的アプローチを通して. 龍谷大学大学院研究紀要 社会学・社会福祉学15, p.89-96.
- 信岡利枝・鈴木敦子(2001): 体外受精・胚移植を受けることをめぐり女性が経験していることに関する研究. 看護学統合研究2(2), p.25-41, 広島文化学園大学.
- 小川久貴子・安達久美子他(2007): 10代女性が妊娠を継続するに至った経験. 日本助産学会誌21(1), p.17-29.
- 岡田明日香(2007): 子どもの不登校を経験した母親に関する臨床心理学的研究-不登校児童・生徒の母親の語りから. 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要8, p.59-60.
- 榊原哲也(2007): 現象学とは何か-看護ケア理論における現象学的アプローチの理解のために(特集 尊厳って何だ? 希望って何だ?-緩和ケアへの現象学的アプローチ. 緩和ケア17(5), p.386-390, 青海社.
- 榊原哲也(2008): 看護ケア理論における現象学的アプローチ-

- その概観と批判的コメント-J. フッサール研究6, p.97-109.
- 千田義光(2004): 現象学の基礎. 放送大学教育振興会.
- 千田みゆき(2009): 現象学的アプローチによる看護研究の動向. 埼玉医科大学看護学科紀要3(1), p.17-23.
- 柴田美央(2006): 重度心身障害のある子どもから育児の力を見出す母親の体験. 学長特別研究費研究報告書2005, p.70-77, 新潟県立看護大学.
- 下山晴彦・丹野義彦(2001): 講座 臨床心理学〈1〉臨床心理学とは何か. 東京大学出版会.
- 下山晴彦(2004): 心理学の新しいかたち, 誠心書房.
- 鈴木千絵子・横手芳恵(2008): 軽度から中等度の障害を持つアルツハイマー病患者の認知構造—面談による現象学的アプローチを用いて—. 岡山県立大学保健福祉学部紀要15(1), p.11-22.
- 竹田青嗣(1989): 現象学入門. NHKブックス.
- 田中いずみ・神郡博他(2000): 精神科看護におけるケアリングの効果的な要素. 富山医科薬科大学看護学会誌3, p.61-74.
- 田中直也(2014): 広汎性発達障害児・者のきょうだいにに関する質的研究—同胞との関係についての語りを通して—. 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要9, p.40-41.
- Thomas, S.T., 八重樫徹訳(2013): メルロ=ポンティのレンズを通して—看護研究への現象学的アプローチを進展させる(特集 看護のチカラ: "未来"にかかわるケアのかたち). 現代思想(11), p.166-190, 青土社.
- Thomas, S.T., Howard, R., Pollio, J., 川原由佳里監修(2006): 患者の声を聴く—現象学的アプローチによる看護の研究と実践. エルゼビア・ジャパン.
- 家高 洋(2011): 現象学的看護研究の基礎的考察—解学的人类学を手引きとして—. 医療・生命と倫理・社会(10), p.23-26, Journal of medicine, life and ethic, society.
- 立入昌美(2007): 青年期における孤独感の現象学的研究. 心理臨床センター紀要3, p.82-94.
- 上野轟(2004): 涙に関する臨床心理学的研究(1): そのコンセプトにかかわって. 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要3, p.49-55.
- 上野轟(2005): 涙に関する臨床心理学的研究(2): 涙が援助的理解関係にとってもつ意味と効用. 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要4, p.63-74.
- Van den Berg, J.H., 早坂泰次郎訳(1976): 人間ひとりひとり—現象学的精神病理学入門. 現代社.
- Van Manen, M. (1990): Researching Lived Experience—Human Science for an Action Sensitive Pedagogy. State Univ of New York.
- Van Manen, M., 村井尚子訳(2011): 生きられた経験の探究—人間科学がひらく感受性豊かな"教育"の世界. ゆみる出版.
- 渡辺美千代・菊井和子他(2004): 意思決定を支える看護師の役割葛藤に関する看護倫理的考察—ナラティブからの現象学的方法による分析—. 医療・生命と倫理・社会 3(2), p.62-77.
- 渡辺美千代他(2004): 看護における現象学の活用とその動向(焦点 看護研究と現象学的アプローチの動向). 看護研究増刊号37(5), p.431-441, 医学書院.
- Willig, C., 上淵寿・大家まゆみ共訳(2003): 心理学のための質的研究法入門. 培風館.
- 山竹伸二(2010): 現象学的心理学の可能性. 大阪経済法科大学アジア太平洋研究センターアジア太平洋レビュー (7), 28-40.

Contributions of Phenomenological Approach to Research in Clinical Psychology: Focusing on concepts of particularity and universality

NAKAMURA Msafumi, OKADA Asuka, FUJITA Chizuko

This article reviewed research papers with the phenomenological approach mainly in the realms of nursing and psychology with the introduction of phenomenology in terms of its history, main concepts, and some methodological backgrounds. It then discussed about the possible contributions of the phenomenological approach to the issues on the clinical psychology especially on its emphases on both particularity and universality of the human experiences.

KeyWords : Research in Clinical Psychology, Phenomenological Approach, particularity and universality